

# 備後国杭荘における名主座について

蘭部寿樹

The *Myoshu-Za* in *KUINO-SHO* of *BINGO* Country  
SONOBE Toshiki

はじめに

- ①惣荘名主座の成立
  - ②惣荘名主座の構成と運営
  - ③惣荘名主座と個別村落名主座・宮座
  - ④名単位の祭祀
- おわりに

## 【論文要旨】

本稿は、備後国御調郡杭荘（現広島県三原市久井地域）における名主座の構成と展開について論じたものである。名主座とは、一四世紀初頭ごろ成立した、村落内身分である名主頭役身分の者たちの身分集団である。名主頭役身分とは、名主職の所持をもとに、宮座である名主座の頭役を勤仕する者の村落内身分のことである。また村落内身分とは、村落集団によりおのおの独自に認定・保証され、一義的にはその村落内で通用し、村落財政により支えられた身分体系である。

杭荘における杭稻荷神社の名主座は一四世紀前期までには成立しており、見子当（神楽座）・東座・西座という構成であった。中世後期の杭荘において、杭稻荷神社の惣

荘名主座、下津八幡宮の準惣荘名主座（下津・吉田両村の名を基盤とする）、そして江木村の良神社、吉田村の厳島社、天満宮、某社（大仙社力）、和草村の（上組）八幡宮、助原村の高杉社、某社（愛宕社力）、某社（上大幡社力）、某社（中大幡社力）、某社（大幡社力）、某社（神社名不詳）及び下津村の金比羅社など十二社の個別村落宮座が成立していた。このことから、一村落到一神社（宮座）という思い込みが従来の研究にみられたことに警鐘を鳴らした。

【キーワード】名主座、宮座、村落内身分、名単位の祭祀、備後国杭荘

## はじめに

本稿は、備後国御調郡杭荘（現広島県三原市久井地域）における名主座の構成と展開について論じるものである。

名主座とは、一四世紀初頭ごろ成立した、村落内身分である名主頭役身分の者たちの身分集団である。<sup>(1)</sup>

名主頭役身分とは、名主職の所持をもとに、宮座である名主座の頭役を勤仕する者の村落内身分のことである。また村落内身分とは、村落集団によりおのおの独自に認定・保証され、一義的にはその村落内で通用し、村落財政により支えられた身分体系である。

備後国杭荘の名主座については、藤井昭氏の先行研究がある。<sup>(2)</sup> 藤井氏の研究は、杭稲荷神社（現久井稲生神社）における現行の名主座祭祀と文献上の名（みよう）とを対比して、名主座の構成と祭祀形態、名の内部構造などを明らかにした労作である。これにより名主座の祭祀と名との関係が具体的に明らかにされた。

しかしその一方で、村落における名主座の位置づけやその変化など、名主座の歴史的な変化や歴史社会における名主座のありかたに関する考察が藤井氏の研究では弱い。ここでは、この点を勘案して、考察をすすめたい。

杭荘名主座に関する史料としては、久井稲生神社文書・山科家文書がある。久井稲生神社文書は久井稲生神社で宮司の羽田家が保管する文書群、山科家文書は東座触頭とされる山科家が保管する文書群である。山科家文書の一部は活字化されているが、それ以外の文書は活字化されていない。今回、国立歴史民俗博物館共同研究「宮座と社会」の一環として撮影したものを<sup>(3)</sup>を用いる。<sup>(4)</sup>

本稿では、名主座の構成と運営のありかた、及び惣荘の名主座と個別

村落の名主座との関連などの点を中心に、杭荘における名主座を考察したい。

## ①惣荘名主座の成立

備後国杭荘は、平安後期に成立したと推定され、京都伏見稲荷神社の領地であった。<sup>(5)</sup> 同荘の範囲は、後述する杭稲荷神社の祭祀圏から推して、江木・下津・吉田・勘原・和草・泉・羽倉の諸地域にわたるものと思われる。

杭稲荷神社の由来記によると、九三八（天慶元）年、杭荘内下津村谷の原田に稲荷神が影向した。そこに七郷の民が杭木を持ち寄って社殿を造営したことから、この地域を杭荘と呼んだという。

この所伝について実否は不明であるが、杭荘成立期に杭稲荷神社が領主の稲荷神社から勧請されたものとみなしてよからう。その点で注意されるのは、現在の久井稲生神社の境内摂社に祀られている八重垣神社（祇園神社）である。『藝藩通志』によると、同社は稲荷神勧請以前から祀られていた地主神だという伝承がある。<sup>(7)</sup> ここに、杭荘形成期における荘園在地祭祀をめぐる動きがあったであろうことが想定される。

その後、時期は不明であるが、稲荷神は現在の社地である江木村北方の亀甲山に遷座した。なお、現在の久井稲生神社という社名は、近代に杭稲荷宮・杭稲荷神社から改称したものである。

由来記に七郷の民が杭の稲荷神を祀ったように、杭稲荷神社は、杭荘の荘鎮守であった。そして杭稲荷神社の名主座は、杭荘全域すなわち江木・下津・吉田・勘原・和草・泉・羽倉の村落を祭祀圏としていた。しかし、その祭祀は個別村落単位ではなく、名を単位とするものであった。そこでまず杭稲荷神社名主座のほぼ全容を示す史料を提示したい。

荷  
稻○御当之覚

△了家分

宗平 乗宗 貞森 近末 国行 森広 宗乗 末成 末正 森光 長正 光信 森重 是清 吉広 貞清 是重 重宗 広正 広光 行広 実光 時宗 乗時 国広

△地頭分

時乗 清実 近広 吉国 年信 末信 宗藤 高透 森兼 兼本 為清 影久 久年 友重 宗重 旦光 貞末 為安 宗信 近吉 国時 森数 国末 行実 兼正

西へ入ル

光宗 末光 貞広 是兼 近広 光長 国安 藤森 秋光 有末 近重 貞信 吉光 光正 貞久 重藤 末長 為安 石丸 貞友 末宗 末近

右御稻荷御湯文移シ  
当

老人者

実正 貞宗 行藤 友宗 貞光 高透 重常 旦処 貞広 宗広 重実 清宗 末年 重年 時森 秋安 行兼 光ふさ 重乗 宗里 末藤 太郎丸 安森 友安

慶長三年

八月十五日

□□(花押)

貞光源右衛門

これは一五九八(慶長三)年の頭文である。ここには「名」(みよう)という記載こそないが、「国広」「兼正」など名によくみられる嘉名が「了家分」「地頭分」にわかれて二段に記載されている。

「了家分」は領家分のこと、領家座や東座とも呼ばれ、「地頭分」は地頭座や西座とも呼ばれる。<sup>(9)</sup> 領家座は四七名、地頭座は四九名で構成されている。ただし、為安、近広、貞広の三名は領家座・地頭座双方に重複している。また領家座の光宗は「西へ入ル」と注記されているが、地頭座には所見がない。また地頭座の高透は「菅人者」という注記付きで同じ地頭座に重複記載されている。

名はほとんどが二つずつ括弧に括られている。これは二名が番を組んで頭役を勤仕したことを意味している。この方式は、現在の久井稲生神社における祭祀「お当座」でも継承されている。<sup>(10)</sup>

領家座の名の所在地は、一六二四(寛永元)年の史料からみて、下津・吉田・泉・羽倉にわたっている。一方、地頭座の名の所在地は、一九〇九(明治四二)年の御当帳写と照合すると、江木・和草・泉・勘原・吉田にわたることが確認できる。<sup>(12)</sup>

領家座の名がある下津・吉田・泉・羽倉は、杭荘の南方、地頭座の名がある江木・和草・泉・勘原・吉田は同荘の北方にほぼ分布する。

注意したいのは、泉、吉田にはどちらの座の名も存在することである。具体的には、泉には、領家座の重宗・是清・森光・乗宗・為安・重藤・有末・光長があり、また地頭座の貞末・久年・森兼・時乗・重乗・行兼・重実・重常も所在する。また吉田には、領家座の藤森・国安と地頭座の貞広・旦処がみられる。

以上の事実、領家座・地頭座が、名を単位としつつ、個別村落ごと

に截然と杭荘内を分割しているわけではないことを示している。

中国地方において、惣荘(惣郷)の下に個別村落が形成してくるのは、<sup>(13)</sup> 備中国新見荘の事例などから、少なくとも一四世紀前期と思われる。

また領家座・地頭座の名称からみて、この区分は領家・地頭の地下地分を反映したものだと考えられる。

これらの点から、杭荘において個別村落が徴税単位にまで成長してくる一四世紀前期以前に地下地中分が行われた可能性が高い。

一方、中国地方において名主座が成立するのは、一般的に一四世紀初頭かそれに近い時期と考えられている。<sup>(14)</sup>

そこで、個別村落が未成熟でかつ地下地中分が実施された後の時期ということから、一四世紀前期までに、杭稲荷神社名主座の領家座・地頭座は成立していたと想定できよう。

杭稲荷神社名主座を構成していたのは、領家座(東座)・地頭座(西座)と見子ノ当(以下、見子当と記す)である。見子当の全容は以下の史料のようにみられる。<sup>(15)</sup>

見子とう覚

未之年

一 かけ久

一 ほうさこ

これハさね正

申之年

一 さたみつ

一 九郎右衛門

これハ三クハ

酉之年

一 かね正

一 九郎右衛門

これハ九郎左衛門まへもんで

けん子

けん子

見子

けん子

へんとう

見子

戌之年		
一 宮本	神主	
きようふ 是ハ下津村まへどい	見子	
亥ノとし		
一 門田	へんとう	
(さね正 これハ宮さこ	見子	
子ノとし		
一 そね	ねき	
一 むねとう	見子	
丑ノ□		
(とちさこ 是ハ兼正	見子	
一 (大神田 これそね	神主	
寅ノ□		
一 物申	けん子	
一 いきとう	見子	
卯ノとし		
一 末のふ	見子	
一 (とうとう これ■とち迫	けん子	
右年付ニ而ハ紛申候としくあたり申所ニ○付札仕候而、それお以前之とうにんしり、其つきくふれ可申、無失念付札可仕事かんやう二候	たれ仕と	
触本 江木村 金正		

名称は見子当というが、実質的には神主や見子などの座である。この

見子当も名ごとに記載されている。また二名ずつ番を組んで頭役を勤仕していた状況は、領家座・地頭座と同様である。  
そこで次にこの三座がどのように関連し、どのように運営されていたのかをみてみよう。

## ②惣荘名主座の構成と運営

杭稻荷神社名主座は、杭荘全体にわたる組織である。そこでまず問題になるのは荘園の組織、なかんずく荘官との関係である。

一二九三（正応六）年の史料に、「稻荷社領杭庄下司職」が問題となっている。<sup>(16)</sup>「景実得理」とあつて、景実なる人物が杭荘下司職を所持していたようであるが、詳細は不明である。この後、下司職に関する徴証は史料上みられない。

鎌倉期の地頭職についても徴証がない。南北朝期にはいると、一三五（観応二）年、足利尊氏が三吉覚弁に備後国泉村地頭職を与えている。<sup>(17)</sup>この宛行状の泉村地頭職には「波佐竹四郎二郎跡」と割注があり、この地頭職が鎌倉期以来のものであった可能性を示唆する。また、この三吉覚弁による泉村地頭職支配は、小文一族なるものの妨害があつて、安定しなかつたようである。<sup>(18)</sup>

ここで注意したいのは、前述のように杭荘泉村には地頭座の貞末・久年・森兼・時乗・重乗・行兼・重実・重常名が所在している点である。三吉覚弁が得た泉村地頭職は、下地中分後の地頭方の名を基盤としたものであり、鎌倉期の地頭職の一部をなすものであったと考えられる。ただし、泉村には領家座の重宗・是清・森光・乗宗・為安・重藤・有末・光長名もあるので、泉村地頭職といっても泉村一円に及ぶものではなかつたであろう。

このように杭荘には下司職、地頭職が存在していた。



しかし注意したいのは、これら下司や地頭の所職や名田に関する徴証が、残存している名主座関係史料のなかにほとんどみられないことである。また名主座の各名そのものが地頭などの所職とかかわることを端的に示すものも一切ない。

前述した泉村地頭職と関連する可能性がある地頭座の貞末・久年・森兼・時乗・重乗・行兼・重実・重常名も、まとまった形で地頭名という形態をとっているわけではない。

以上の点からみて、杭荘名主座の構成には少なくとも下司・地頭クラスの名主が直接関与してはいなかったものと思われる。この点は、中国地方の他の名主座と同様である<sup>(19)</sup>。

一方、杭荘には公文も存在した。史料的には、一六世紀中期に「公文分」というほぼ得分権化した形ででてくる<sup>(20)</sup>。これは、「物申」という名主座社家の職に付随しているものである。この史料そのものは、公文そのものが名主座に直接関与していたことを示すものではない。

ただ、社家の物申職との関連で、公文が名主座の構成員であった可能性も想定できる。安芸国久島郷大歳神社の名主座では、公文とほぼ同レベルの荘官とみられる久島郷刀祢が名主座の構成員であった<sup>(21)</sup>。公文クラスは、杭荘名主座見子当の一員であった可能性も考えられよう。

それでは、見子当の構成はどうなっているのだろうか。見子当の構成を示す最も古い史料（一七五四《宝暦四》年かそれ以前成立）によると、見子当は神主二名、祢宜一名、別当（へんとう）二名、巫女（見子、けん子）一三名の合計一八名で構成されている<sup>(22)</sup>。

このうち、神主の「宮本」は、現在の久井稲生神社宮司である羽田氏が継承しているものである<sup>(23)</sup>。「宮本」は羽田家の屋号でもあり、また羽田氏は領家座の広正名の名主でもある。

もう一方の神主「大神田」は、近代に江木村の岡田氏が勤仕している。大神田及び岡田氏の関係の詳細は不明であるが、見子当の巫女や江木村

の良神社における「きよむね」名の主も、別家だが同じ岡田姓の家である。巫女（見子・けん子）一三名のなかに、「物申」がみえる。物申は、一般に「祝詞などを奏上すること」とされている<sup>(25)</sup>。見子当の物申は、「物申役」とも呼ばれる杭庄御稲荷「神職」である<sup>(26)</sup>。『藝藩通志』は、物申を「祝白」（ものまをし）と記載している<sup>(27)</sup>。物申は、一般にいところの「祝」に相当する神職ではなかったか。

物申を勤める江木村の山科氏は、領家座触頭（後述）の光宗名の名主である。また山科氏は、近代、江木村良神社・諏訪神社の社衛（社用係）にも任命されている<sup>(28)</sup>。

見子の「さたみつ」は、近代、江木村の千鶴・坂本氏が勤めている。この貞光名は、後述する戦国期の物申役相論の一方の当事者である貞光氏が本来所持していたものである<sup>(29)</sup>。また貞光名（定光名）はいまでは江木村の岡田氏が勤仕しているが、少なくとも一五九八（慶長三）年までは江木村の貞光（定光）氏が勤仕していたものである<sup>(30)</sup>。

前にみたように、現在は領家座の山科氏が物申を勤仕しており、地頭座貞光名の物申の相論史料も同家が所有している。この点から、かつて貞光氏が勤仕していた物申職を山科氏が継承したということも想定できる。古文書の流れ（移動）からすると、この見方の方が自然かもしれない。しかし、そうであれば、見子当に「物申」（名）とともに「さたみつ」名が残存しているのは、やや不自然に思われる。

現在、見子当に「物申」（名）と「さたみつ」が併存している点から考えて、本来、見子当には、物申役が東西二座に相応して二名あったのではないだろうか。そうであるならば、現在、山科氏が勤仕しているのは、領家座に相当する物申役であろう。一方、地頭座に相当する貞光名の物申役は、ある段階で退転し、見子当に「さたみつ」名のみが残ったとみるわけである。そして、貞光名の物申が退転した後に、何らかの理由で、山科氏に地頭座貞光名の物申の相論史料が伝わったのではなからうか。

見子当には東西二座に相当するように、領家座担当の物申と地頭座担当の物申が本来は存在していたとみておきたい。

なお、地頭座の定光氏は、助歳名の名主として、地頭座の触頭を勤仕している。この点については後述する。

欄宜の「そね」は、近代、江木村・賀上氏が勤仕している。別の史料に「恵木村祇園社祢宜 曾欄」とあるので、この欄宜「そね」は江木村祇園社の社家と思われる。この江木村祇園社とは、現在久井稲生神社境内にある撰社・八重垣神社であろう。また見子当の神主「大神田」の箇所に「これ（ハ）そね」とあることから、欄宜「そね」と神主「大神田」との間に何らかの関係があったとみられる。<sup>(32)</sup>

次に見子の「きようふ」に「是ハ下津村まへどい」とあることに注意したい。この「きようふ」は、近代、下津村・前土居の大原氏が勤仕している。<sup>(33)</sup>この大原氏は、下津八幡宮の神主なのである。<sup>(34)</sup>また大原氏は、下津八幡宮「宗法」名の名主でもある。見子当の「きようふ」名はその職掌を「見子」とされているが、下津八幡宮神主を兼任している者が単なる見子とは思えない。大原氏は、杭稲荷神社社家の一員であり、かつ下津八幡宮神主でもあったといえよう。

ところで、杭稲荷神社には別当寺・供僧寺という寺があったといわれる。<sup>(35)</sup>別当寺である神宮寺は、江木村、現在の久井稲生神社神楽殿下にあったとされるが、廃絶している。その後、和草村の千林寺（真言宗）が神宮寺の後を受けて、明治初年まで別当寺を勤めていたという。この他、下津村の伝光寺（現専光寺。浄土真宗）と箱石寺（廃寺）が供僧寺であったという。杭稲荷神社本祭の祭列に「神宮寺」、「役ソウ（僧）」、「本坊箱石寺」、「石王山相石寺」が加わっているので、神宮寺や供僧寺の存在は確認できる。<sup>(36)</sup>しかし、別当寺・供僧寺が杭稲荷神社の運営にどのような関わっていたのかについては、不明である。

ただ『藝藩通志』には、「稲荷宮注連頭亀甲山神宮寺」とある。<sup>(37)</sup>杭稲

荷神社の注連頭を神宮寺が勤仕したのである。注連頭がどのような役職であるかは不明である。現在の久井稲生神社宮座祭祀に注連頭という役職が存在しないのは、神仏分離で神宮寺が祭祀から離れていったためであると考えられよう。

この注連頭とともに『藝藩通志』は、「別当猪儀兼政、門田利春」をあげている。これが現在の別当「かね正」・「門田」に相当することは明らかである。

別当の「かね正」は、近代では江木村の猪儀氏が勤めている。猪儀氏はまた、地頭座の兼正名の名主でもある。

もう一方の別当「門田」は、近代、江木村の門田・福松氏が勤仕している。この門田・福松氏は門田の屋号をもち、江木村の良神社における「まいとんで」名の名主にもなっている。<sup>(38)</sup>またこの門田は、戦国期に臨時に物申役を預かった門田刑部大夫とも関連するものと思われる（この点は後述する）。

注連頭が別当寺である神宮寺の所役であるのならば、この二つの別当は供僧寺が担当した所役なのではないだろうか。供僧寺が退転したり、神仏分離で祭祀から離れていって、別当は個人の所役のように変化したのではなからうか。ただ注連頭が現在の見子当に痕跡を留めないのに対して、別当二名のみが残存している経緯は不明である。

以上のように一八名の見子当成員のうち、「宮本」・「大神田」（杭稲荷神社神主）、（東西二名の）「物申」（杭稲荷神社神職）、祇園社「祢宜」、下津八幡神社神主、注連頭（神宮寺）、（二名の）「別当」（供僧寺）の九名が、杭稲荷神社及びそれに関連する神主・神職・供僧であった。これ以外の巫女とされる九名のなにも、祇園社「祢宜」や下津八幡神社神主のように関連する神社の神職であった者がいる可能性が高い。

したがって、見子当は、杭稲荷神社や他社の神職及び別当寺・供僧寺の供僧など、杭荘一円の宗教施設を統括する集団であったと推定される

表1 見子当の構成

名	職掌	名の所在地	関連する座	御当主	本来の職掌(含推定)
かけ久(陰久)	けん子	江木村	地頭座・艮神社	陰久氏	
ほうさこ(これいさね正)	けん子	下津村		南氏	
さたみつ(貞光)〈定光〉	見子	江木村	地頭座・艮神社	千鶴氏	物申(杭稻荷神社の神職) 地頭座の触頭
九郎右衛門(三クハ)	けん子	江木村		宮迫氏	
かね正(兼正・金正)	へんとう	江木村	地頭座・艮神社	猪儀氏	見子当の触本(触頭) 別当寺・供僧寺の住持
九郎右衛門(九郎左衛門まへもんで) 〈まへ門田〉	見子	江木村		渡辺氏	
宮本	神主	下津村	(広正名=領家座)	羽田氏	杭稻荷神社の神主
きようふ(下津村まへどい)	見子	下津村		大原氏	下津八幡神社の神主
門田	へんとう	江木村		門田氏	別当寺・供僧寺の住持
さね正(宮さこ)	見子	江木村	地頭座・艮神社	秋保氏	
そね	ねき	江木村		賀上氏	祇園社の祢宜
むねとう(宗藤)	見子	和草村	地頭座	宗藤氏	
とちさこ(兼正)	見子	江木村		岡田氏	
大神正(そね)	神主	江木村		岡田氏	
物申	けん子	江木村		山科氏	領家座の触頭 物申(杭稻荷神社の神職) 艮神社・諏訪神社の神主
いきとう(ゆきとう)	見子	勘原村		行迫氏	
末のふ(末信)	見子	勘原村	地頭座	迫氏	
とうとう(とち迫)	けん子	江木村		定信氏	

注 (1) 名及び職掌欄は、年末詳(宝暦4年カ) 神子とう覚(稲 009-0004 ~ 0010) の記載をもとにした。  
(2) 御当主及び名の所在地の欄には、玉浦護「宮座「御神酒献備之古式」(詳解)」(久井町文化財協会、1968年)に記載されている1960年当時の御当主とその所在地を参考までに示した。

(表1)。  
次に杭稻荷神社名主座の運営を、見子当と領家座・地頭座との関係のありかたを軸にみてみたい。  
領家座・地頭座には触頭という役職がある。領家座では光宗名が触頭で、現在、同名の名主である江木村の山科氏が担当している。地頭座で

は助歳名が触頭で、現在、同名の名主である勘原村の定光氏が担当している。  
それでは、触頭とはどのような職務なのだろうか。そこで、次の史料をみてみたい。

当神社東西両座御当帳ノ儀ハ往古ヨリ触頭手元ニハ保存候得共、神社備付ノ物無之、且又触頭ヨリ年々当番主ヘ触レ附クルニモ株主異動アリテ相違ヲ生ジ候事モアリ、古老等ニ尋ネ候次第ニテ困難ヲ極メ、近來ハ神社費ヨリ御当料ヲ支出候場合、神社ニ名簿備付ナクテハ不便不勘候ニ付、今回氏子総代ト熟議、各惣代人字毎ニ調査シ、別紙ノ通り調製、惣代人連印一部ツ、東座(領家分) 触頭山科若之助、西座(地頭分) 定光保太郎ヘ渡シ、異動アレバ時々訂正ヲ加ヘ永遠御神酒献備ノ古式ヲ保存シ報本反始ノ礼典ヲ無欠年執行スベキコト堅要ナリ

但シ御当ニ関スル古式並ニ沿革ハ別帳ニ認メ置ク

明治四十二年拾月拾壹日

稻生神社々掌 羽田正義

氏子総代 山名敬之

(中略)

右御当ヲ所有セル家ニハ從來注連田ト云フ田アリ、毎年東西両座共順番ニ名宛合計四名当番トナル、十月一日注連下シト称シテ久井村字江木山科典膳、是レハ東座受持触頭、全村字勘原定光善祐、是レハ西座受持触頭、此両人当屋ニ行キ其注連田ニ葉付ノ青竹ヲ二ヶ所ニ建テ注連縄ヲ張り神籬ヲ立テ祭事ヲ行フ、(中略) 例祭ノ翌日、両座ノ受持触頭、当屋ニ行キ注連田ニ付キ祭事ヲナシ終テ注連縄等悉皆除ク(下略)<sup>39)</sup>

これによると、触頭の職掌は次のようになる。

① 領家座・地頭座それぞれの御当帳を保管する。



②毎年、各座の当番主に当番であることを触れる。

③当番主の注連田における注連下ろし・注連上げの祭祀を司る。

これらの職務は、一九六八（昭和四三）年の調査時でも継続されている。<sup>(40)</sup>

ここで注意したいのは、領家座の触頭が江木村の山科氏、地頭座の触頭が助原村の定光氏という点である。前に述べたように、領家座の触頭である山科氏は、領家座担当の物申であった。そこで地頭座の触頭である定光氏は、地頭座担当の物申であった可能性が高い。このように、現在の触頭の家と物申であったとみられる家が同一であることに注意したい。

次に注意したいのは、触頭が注連田における注連下ろし・注連上げの祭祀に直接関わっている点である。物申が一般的にいわれる祝詞を奏上すること以外に、具体的にどのような形で祭祀に関わっていたかは不明である。ただ杭稻荷神社神主主催の祭祀以外で、領家座・地頭座の各座に関わる祭祀という点で最もふさわしいのが、この注連下ろし・注連上げの祭祀であろう。その点で、領家座・地頭座の各座にいたと想定される物申がこの祭祀に関わっていたと考えるのが、最も自然であろう。

このことから、触頭の職務は、もともと物申の職務の一環であったものと思われる。神職としての物申が退転した後も、その職務（の一部）が物申勤仕の家に固着して、触頭という形で残存しているのではなからうか。

このことを考えるうえで示唆的なのは、見子当の触頭の問題である。一七五四（宝暦四）年かそれ以前に成立したと思われる「神子とう覚」<sup>(41)</sup>を作成したのは、「触本 江木村 金正」であった。この「触本」というのは、触頭と同じ意味であろう。すなわち、この時期の見子当の触本（触頭）は金正名であったということになる。この「金正」は、同じ史料に「か

ね正 へんとう」とでてくる、「かね正」であろう。「金正」は地頭座にでてくる兼正で、屋号を兼政という江木村の猪儀氏が現在勤仕している名である。この兼正名は、また江木村の良神社名主座の名でもある。<sup>(42)</sup>

ここで注意したいのは、この金正（兼政）名が「へんとう」すなわち別当とされている点である。前述したように別当とは、供僧寺の関係者であると考えられる。

別当が触頭のような職務をおこなえるのかという点については、後述する戦国期の物申相論が参考になる。この相論では、もうひとりの別当である「門田」名の門田刑部大夫及び門田太郎左衛門が貞光四郎三郎（貞光名）の物申職を臨時に預かったことが発端であった。<sup>(43)</sup> 別当の門田氏は、一時「致其勤」すなわち物申の務めをおこなっていたわけである。

見子当では、別当が触頭を兼務していた。というよりも、見子当の別当は領家座・地頭座の触頭に相当する職務についていたとみるべきであろう。

これも詳しくは後述するが、宝暦四年以降のある段階で、見子当の触頭は兼正名から離れて、「宮本」名すなわち杭稻荷神社神主家に移動しているのである。現在でも、見子当の触頭は久井稻生神社宮司が務めている。

以上の点からみて、神職である物申が触頭相当の職務をしていたことは十分に考えられるといえよう。

触頭の職務は、もともと、見子当では別当が、領家座・地頭座では物申が、それぞれ務めていた。そして、見子当・領家座・地頭座三座の触頭がすべて見子当の構成員であったことは重要である。このことの意味は、次にあらためて考えたい。

なお、久井稻生神社祭祀の報告書には、各座に「座頭」（ざがしら）という役職があると記されている。<sup>(44)</sup> 各々の座の最上席に着座する者のことで、見子当は宮本名（下津村の久井稻生神社宮司羽田氏）、領家座は

貞久名（下津村の定久氏）、地頭座は国時名（江木村の門田氏）であるという。しかし、座頭は古文書にはみられないし、見子当で触頭も兼務する宮本名以外は、座頭に特別の職務はない。座頭という名称そのものは、新しいものかもしれない。ただ当該の家が古くからの家柄であることは、これまでみてきたとおりである。

### ③惣荘名主座と個別村落名主座・宮座

これまで度々触れてきたが、天文年間に地頭座の物申職をめぐる争いが起こる。次の史料をみてみよう。

（花押）

杭庄御稻荷物申役之事、先年雖貞光存知之前候、貞光息四郎三郎依為幼少、右神職之事、門田刑部大夫契約之候、然処、只今四郎三郎以先規之旨可致存知之由、去夏以来申操候、就刑部大夫近年致其勤候之条、彼者一期可存知之候、以後之儀者、四郎三郎社役相勤候而、於其上、刑部孫子四郎三郎女子申合、物申役之事、無相違、長久可致其調候、自然於離別之族者、彼役之事可被付貞光女子者也、仍御下知之状、如件

天文廿三年  
十月十六日

桂孫七郎  
景信（花押）

真田大和守  
景久（花押）

赤河左京亮  
元保（花押）

貞光四郎三郎<sup>(45)</sup>殿

先代の貞光某が務めていた物申職を、貞光某の子息である貞光四郎三郎が幼少であるということを理由に、門田刑部大夫が預かって勤仕していた。その後、成長した貞光四郎三郎が門田刑部大夫に物申職の返還を

求めた。門田がそれに応じなかったことから相論になった。<sup>(46)</sup> それに對してだされた裁定が本文書である。

この文書では、門田刑部大夫が死ぬまで物申職を務める。その後は貞光四郎三郎が同職を引き継ぐ。そして将来的には門田の子孫と四郎三郎の娘とを結婚させ、その夫婦（実際には門田家子孫の男子）が物申職を受け継ぐ。ただしその結婚が破綻した場合は、四郎三郎の娘が物申職を受け継ぐとしている。

この後の経過を示す史料はない。

近代の状況を見ると、貞光氏の後裔と思われる勘原村の定光氏は、地頭座・助藏名の名主であり、かつ地頭座の触頭である。ところが、見子当の定光名は江木村の千鶴氏が勤仕しており、またこの定光名は物申ではなく、単なる見子である。

また門田氏の後裔と思われる江木村の門田氏は、見子当の門田名名主である。ただし門田名は別当ではあるが、物申ではない。

そして見子当で物申は江木村・山科氏の物申名だけである。この物申名は別当であるが、山科氏が領家座の触頭をしていることから、前述したように、山科氏の物申名は領家座に對應する物申であつたと考えられる。

すなわち近代において、地頭座の物申は消滅し、見子座の定光名は別家が継承し、地頭座の触頭のみを定光氏が維持している状況なのである。以上の点からみて、天文の地頭座物申相論を起点として、その後のある段階で地頭座の物申職は退転したものと思われる。

それでは、何故に地頭座物申職をめぐる相論がなされたのであろうか。その点は、前述したように物申がそれぞれ領家座・地頭座の触頭を兼務していたことに象徴されるものと思われる。すなわち、杭荘内の名主座祭祀をめぐる、社家間のリーダーシップをめぐる争いが背景にあつたのではなからうか。

物申職は本来触頭と同様の役を務めていた。また見子当には下津八幡宮や江木村祇園社の神主社家がいた。そこで、下津村や江木村など個別村落の祭祀の面から、杭荘名主座ならびに見子当の問題を考えてみよう。まず前にふれた下津村の下津八幡宮と江木村の良神社についてみてみよう。

一六四九（慶安二）年、下津八幡宮の頭文には、二四の名がみられる。<sup>(47)</sup>このうち、二一名は領家座の名と同じであり、そのうちの近広・貞広の二名は領家座・地頭座双方にみられる。また旦所名は地頭座にある名である。残る清兼名のみが、領家座・地頭座と関係のない名である。このようにほとんど中世以来の名で構成されている下津八幡宮名主座は、中世後期に成立したものと考えるよからう。

この下津八幡宮で注意したいのは、同宮名主座を構成する名がほとんど下津村に所在している一方、行広・旦所・貞広・石丸の四名が吉田村に位置している点である。<sup>(49)</sup>すなわち、下津八幡宮は下津村及び吉田村を祭祀圏にしているのである。また後述するように吉田村では、下津八幡宮を「村方協議」の対象となるような村落鎮守（またはそれに準じるもの）として扱っている。

これらの点から、下津八幡宮の名主座は、単なる個別村落名主座ではなく、複数の村落にまたがる準惣荘鎮守社の名主座であると位置づけることができる。このような準惣荘宮座については、かつて美作国弓削荘の厨谷神社の事例を指摘したことがある。<sup>(50)</sup>

以上のことから、下津八幡宮名主座は、中世後期に成立した、杭荘の準惣荘宮座的な存在であるといえよう。

一方、江木村の良神社名主座の全一八名中、九名が地頭座にある名（うち四名が見子当と重複している）である。地頭座の名が中核であるという点において、領家座の名が中心の下津八幡宮とは対照的である。良神社残りの九名、「えきのした、ひらもと、たかなす、よねまる、ふもと、

まいとみやす、とらのまい、まいとんで、ばくろうぎ」は、領家座・地頭座ともに関係がない。下津八幡宮に比べて、中世以来の名が少ないが、良神社の名主座も、中世後期に成立したものとみてよからう。

下津八幡宮と良神社の状況の相違は、ひとつには前者の名を示す史料が近世の頭文であり、後者が近代の頭文である点である。また中世でも遅い段階に後者（の名主座）が形成したという可能性も考えられる。

また良神社のいずれの名も、江木村に所在している。したがって良神社は個別村落単位の名主座である。

中世以来の名で組織されている全荘的な杭稻荷神社名主座や準惣荘宮座の下津八幡宮に比べて、祭祀圏の狭い個別村落宮座の良神社では、経済的規模の点などから、名の変質や新名の形成などの変容要因を強く受けていた可能性が高い。

このことは、美作国弓削荘における準惣荘宮座である厨谷神社や個別村落宮座である山王宮例講でも同様であった。惣荘名主座である弓削荘志呂宮の名主座が中世前期以来の旧名を基盤とするのに対して、厨谷神社やさらに個別村落を基盤とする山王宮例講では南北朝期以降の新名・小名が多くのウエイトを占めていた。<sup>(51)</sup>

下津八幡宮や良神社の名のありかたについては、とりあえず以上のよう理解しておきたい。

史料としては近代のものしか残されていないが、杭荘には下津八幡宮や良神社以外にも、個別村落の宮座があった。

明治一二年から一四年の間に四冊作成された諸神社出勤雑費社入附込帖という史料には、杭荘内各村落の祭祀に関する記述がみられる。<sup>(52)</sup>そのなかの吉田村の項目に八幡宮がみえ、それに関して「吉光名」「石丸名」「当注連下し」「村方協議之上本年ヨリ勤ム」などの記載がみえる（附込帖B）。この吉光名、石丸名はいずれも吉田村に所在する下津八幡宮の名であり、また中世以来の杭稻荷神社領家座の名でもある。<sup>(53)</sup>「村方協

議之上本年ヨリ勤ム」とあるのは、吉光名分の名頭役を西谷幾蔵という人が本年から勤仕することの可否を村方が協議して許容したことを意味している。このことから、下津八幡宮の名主座は吉田村でも村鎮守と同じ扱いをされていることがわかる。

またこの下津八幡宮に関して、吉光名、石丸名などの名がみられ、「当注連下し」という記載があることから、近代の下津八幡宮においても名主座の祭祀がおこなわれていたことがわかる。「当注連下し」は名頭人の注連田における注連下ろしの神事を指すことはいまでもなからう。

吉田村では、これ以外に吉田村厳島社で「当・<sup>(マ)</sup>当夜・(当) 昼」(附込帖D)、吉田村天満宮で「当」(附込帖D)、吉田村某社(大仙社力)で「当」(附込帖B・D)の記載がみられる。すなわち、吉田村では下津八幡宮の名主座に参加するのみならず、同村内の厳島社・天満宮・某社(大仙社力)でも頭役神事がおこなわれていたのである。

和草村の(上組)八幡宮にも、「宮講」、「当注連下し」、「八幡御当」などの記載がみられる(附込帖A・B)。

勘原村でも、高杉社に「当屋」、「夕当」、「(昼) 当」(附込帖D)、某社(愛宕社力)に「当」、「当番」、「下谷当番」(附込帖B・D)、某社(上大幡社力)に「上大幡祭」、「番」(附込帖B)、某社(大幡社力)に「大幡祭」、「下谷当番」(附込帖D)、及び勘原村某社(神社名不詳)に「宮講」(附込帖A・B・D)とある。

下津村でも金比羅社に「当番」、「献供当番」(附込帖B・D)がみられる。また下津八幡宮名主座の「末長名」(下津村)や「当」、「注連下し」などの記載が、下津村の項にみえる(附込帖D)。

以上のように、個別村落の宮座と判定されたのは、吉田村の厳島社・天満宮・某社(大仙社力)、和草村の(上組)八幡宮、勘原村の高杉社・某社(愛宕社力)・某社(上大幡社力)・某社(中大幡社力)・某社(大

幡社力)・某社(神社名不詳)及び下津村の金比羅社で、全部で一一社になる。

この一一社に良神社及び準惣荘名主座の下津八幡宮を加えて一覧表にしたのが、「表2 準惣荘及び個別村落の宮座一覧」である。これを見てあらためて思うのは、原田敏明氏の説<sup>(4)</sup>のように、一村落に一神社(一宮座)という従来の思い込みのもつ一面性である。明治の神社合祀などで神社が大幅に廃絶していった後の状況からのみで宮座を考える研究傾向が、これまでであった。しかし、表2によると、一村落に複数の宮座があったことがうかがえる。現存の民俗儀礼でも、「宮の当」と「堂の当」などのように、本来は複数の宗教施設の頭役が一つの宮座組織で営まれている例が数多く見られる。これは、かつては複数の施設の複数の宮座頭役があつた名残であろう。近代以前、たとえ村落内集団としては一つであっても、複数の宗教施設の頭役を勤仕していた可能性も十分考えられる。今後は、この点を十分ふまえて、宮座祭祀の復元をおこなっていく必要がある。

さて、これら個別村落の宮座は、いつ頃、成立したものであろうか。その点を考えるうえで検討したいのが、附込帖にみえる他の神社祭祀である。

たとえば、江木村には、諏訪神社の龍王祭・水分祭があり(附込帖B・D)、下津村には厳島神社や水分神社の祭礼や某社の牛馬祭がある(附込帖B・D)。和草村には、下組八坂神社の八坂祭や水神社・貴船社・愛宕社の祭礼がある(附込帖A・D)、羽倉村には矢矧神社の矢矧祭、伊勢神社の伊勢祭、天降神社の天降祭及び八幡宮の祭礼がある(附込帖A・D)。泉村には八幡宮の八幡祭、多賀神社の多賀祭及び吉備津神社・貴船社の祭礼があり(附込帖A・D)、勘原村八幡宮の八幡祭(附込帖A・C・D)や吉田村某社の金神祭もある(附込帖B・D)。これら一八社の祭礼はほとんどが氏子祭祀によるものと思われる。また氏子祭祀でな



表2 準惣荘及び個別村落の宮座一覧

村落名	神社名	史料上の特徴的な表記	典拠
下津村	下津八幡宮	下津八幡神社御当帳, 当, 注連下し, 末長名	①②⑤
下津村	金比羅社	当番, 献供当番	④⑤
江木村	良神社	良神社御當帳	⑥
吉田村	下津八幡宮	下津八幡神社御当帳, 当注連下し, 村方協議之上本年ヨリ勤ム	①②④
吉田村	厳島社	当, 当夜(ママ), (当) 昼	⑤
吉田村	天満宮	当	⑤
吉田村	某社(大仙社カ)	当	④⑤
和草村	(上組) 八幡宮	宮講, 当注連下し, 八幡御当	③④
勘原村	某社(神社名不詳)	宮講	③④⑤
勘原村	高杉社	当屋, 夕当, (昼) 当	⑤
勘原村	某社(愛宕社カ)	当, 当番, 下谷当番	④⑤
勘原村	某社(上大幡社カ)	上大幡祭, 番	④
勘原村	某社(中大幡社カ)	中大幡祭, 番	④
勘原村	某社(大幡社カ)	大幡祭, 下谷当番	⑤

【典拠】(「稲」は久井稲生神社文書の写真版, 「山」は山科家文書の写真版を意味する)

- ①慶安2年下津八幡宮御当覚(稲 076-0003)  
 ②大正5年下津八幡神社御当帳(稲 076-0001 ~ 0015)  
 ③明治12年諸神社出勤雑費社入附込帖(稲 009-0044 ~ 0114)  
 ④明治13年諸神社出勤雑費社入附込帖(稲 009-0121 ~ 0173)  
 ⑤明治14年諸神社出勤雑費社入附込帖(稲 009-0198 ~ 0251)  
 ⑥大正5年良神社御当帳(稲 078-0001 ~ 0016・山 1-03-0014-0001 ~ 0007)

くとも、記載の仕方からみて宮座ではないことは明らかである。  
 このように附込帖には、一一社の宮座と同じく、一八社に及ぶ氏子祭礼(または宮座とは異なる祭祀)が記録されている。村落における氏子祭祀は、一般的に近世社会の所産である。<sup>(55)</sup>  
 また氏子祭祀が隆盛していく一方で、近世において形骸化しつつある宮座祭祀を個別村落が新たに開始するというのも、この一二社(良神社を含む)という数からして、不自然であろう。  
 以上の点からみて、この一一社の個別村落宮座は、近世氏子祭祀が成立する以前の、中世後期における所産であると考えられる。

中世後期の杭荘においては杭稲荷神社の惣荘名主座、下津八幡宮の準惣荘名主座、そして江木村の良神社など一二社の個別村落宮座が成立していたのである。このような状況は、前述したように、美作国弓削荘における惣荘名主座、準惣荘名主座及び個別村落名主座(宮座)のありかと共通する状況である。

以上のように、鎌倉期以来の旧名を基盤としていた杭稲荷神社の惣荘名主座や下津八幡宮の準惣荘名主座、そして個別村落の宮座が、杭荘において重層的に存在していたのである。

それでは、このような個別村落宮座の祭祀と神主・社家とはどのような関係にあったのだろうか。

前述したように惣荘名主座の見子当には、祇園社祢宜や別当など杭稲荷神社関連寺社の社家・供僧がいた。そして杭荘内の個別村落宮座の神主も見子当の一員であった。

一九一六(大正五)年の下津八幡神社御当帳には、「当神社御当帳ハ慶安二巳年九月調製神主大原家保存有之候」と記されている。<sup>(56)</sup>この大原氏は、前にみたように、見子当の「まへとい刑部」名を勤仕していたのである。

見子当「物申」の山科氏は、矢矧神社の神主でもある。<sup>(57)</sup>この矢矧神社は、さきにみた羽倉村の矢矧神社のことであろう。また山科氏は、一八八一(明治一四)年に江木村の良神社及び諏訪神社の社衛(社用係)にも任命されている。<sup>(58)</sup>

江木村の良神社の神主は、黒田氏であった。一九一六(大正五)年の良神社御当帳に

御調郡久井村大字江木鎮座無格社良神社ハ古社ニシテ往古ヨリ例祭日御神酒献備之古式アリ、御当帳ハ寛政九年卯九月神主黒田要調製、夫ニ依リ毎年触来リ候<sup>(59)</sup>

とある。この黒田氏が見子当の一員であったかどうかは不明である。前



述したように、一八八一（明治一四）年に山科氏が艮神社の社衛に任ぜられている。これは「稻生神社祠掌兼権導 羽田正造」から任じられたものであり、その点から少なくともこの時点には黒田氏は艮神社神主から退いていたものと思われる。見子当の名所持者に黒田氏の名前がみえないのも、こうした事情と一連のものなのかもしれない。ここではいちおう、本来、艮神社神主黒田氏は見子当の一員でもあったが、何らかの事情で神主をやめ、見子当からも退いたものと考えておきたい。

同じく明治一四年に山科氏は諏訪神社の社衛にも任じている。この諏訪神社は、前出した江木村の諏訪神社であろう。これも艮神社と同様、前神主社家の退転にともなう施策なのであろう。この諏訪神社の神主社家も、艮神社神主黒田氏と同様の事情にあるものと推定しておきたい。

個別村落宮座の神主社家については、以上の点しか明らかにできない。下津八幡宮、艮神社、矢矧神社、諏訪神社以外の九つの個別村落宮座の神主社家については全く不明である。一方、見子当は一八名である。見子当の大部分の名は、個別の職掌が不明である。そこで、前記九社以外の個別村落宮座の神主社家も、もともとは見子座の成員だったのではないだろうか。現在、この間の事情を直接知りうる史料は、残されていない。しかし、別の角度からこのことを推測する手だてはある。そこで、いまいちど、話を天文年間物申職相論にもどす。

この相論は、地頭座の物申職を本来の物申職である貞光氏と同職を一時預かった門田氏との間で争われたものである。この物申職は単に見子当における神職ではなく、地頭座の触頭を兼務する役職だった。この後、近世における経緯は不明だが、近代には地頭座の物申は消滅し、見子座の定光名は江木村の千鶴氏が継承し、定光氏は地頭座の触頭のみを維持していた。

ここで重要なのは、物申職が触頭を兼務する神職だという点である。領家座及び地頭座それぞれの物申職は、頭人への触れや注連田の注連下

ろし・注連上げという神事を主宰する。これは杭稻荷神社名主座祭祀の基礎となる作業である。すなわち、物申職を得るということは、杭稻荷神社名主座の主導権の一翼を担うことを意味するのである。逆にいえば、物申相論とは、杭稻荷神社名主座の主導権争いの一端なのである。この主導権争いは、近世を通してさらに拡がっていったものと思われる。

さきに個別村落宮座の存在を示した史料として、明治一二年から一四年の間に四冊作成された諸神社出勤雑費社入附込帖を用いた。実はこの史料は、久井稻生神社神主羽田氏が諸神社に出勤する折の雑費などを記録した覚書なのである。すなわち、この記録に載っている諸社の祭祀は、明治一二年から一四年の時点で久井稻生神社神主羽田氏の管轄下に入っているものなのである。

そこでいま一度、附込帖に記載されていた諸社を神職の面から見直してみよう。

まず下津八幡宮であるが、同社はもともと大原氏が神主を務めていた。附込帖四冊（A～D）すべてに同社の祭祀に関する記載がある。羽田氏が管理する久井稻生神社文書のなかに、慶安二年及び大正五年の下津八幡宮御当覚（帳）がある<sup>(60)</sup>。このような事情は、少なくとも明治一二年以降、羽田氏が下津八幡宮の差配をおこなっていたことの徴証といえよう。大正五年の御当覚帳には明確に「八幡神社受持社掌羽田正義」とある。

艮神社は、少なくとも一七九七（寛政九）年までは黒田要氏が神主を務めていた<sup>(61)</sup>。この艮神社に関しても、附込帖四冊（A～D）すべてに同社の祭祀に関する記載がある。また久井稻生神社文書のなかに大正五年艮神社御当帳がある<sup>(62)</sup>。ここからやはり、少なくとも明治一二年以降、羽田氏が艮神社の差配をおこなっていたことがわかる。

江木村の諏訪神社の神主が誰であったかは、不明である。一七五七（宝暦七）年の江木村諏訪神社縁起に「右願主中田藤右衛門福則」とある<sup>(63)</sup>が、

この中田氏が神主であったかどうかはわからない。この諏訪神社に関しても、附込帖四冊（A～D）すべてに同社の祭祀に関する記載がある。また宝暦七年の江木村諏訪神社縁起も久井稻生神社に所蔵されている。したがって、少なくとも明治一二年以降、羽田氏が諏訪神社の差配をおこなっていたことになる。前にみたように明治一四年、山科氏が長神社及び諏訪神社の社衛（社用係）に任命されているが、これは任命者である羽田氏の管理下にあったポストであるといえよう。

羽倉村の矢矧神社は、少なくとも一八七一（明治四）年まで、山科氏が神主を務めていた。<sup>(64)</sup>この矢矧神社も、附込帖四冊（A～D）すべてに記載があり、少なくとも明治一二年以降、羽田氏が差配をおこなっていたことになる。

これ以外にも、附込帖四冊（A～D）が作成された明治一二年以降、吉田村厳島社、同村天満宮、同村某社（大仙社力）、和草村（上組）八幡宮、勘原村高杉社、同村某社（愛宕社力）、同村某社（上大幡社力）、同村某社（中大幡社力）、同村某社（神社名不詳）、下津村金比羅社の一〇社が羽田氏の差配のもとにおかれている。

このような羽田氏への杭荘内（久井町内）における神職の集中は、直接には近代における帰結である。その背景には近代における村落小社を維持する経済的な困難などがあることだろう。

しかし、明治に入って一〇年間ほどで、これほど多くの神社の差配を集中させられるものであろうか。この動向には、前近代における各神社の神主・神職の相互関係が歴史的前提としてあったのではないだろうか。そしてそれは、近世、さらにはそれ以前、物申相論がおこなわれた戦国期から引き続いた動向の歴史的帰結なのではないだろうか。

すなわち、中世以来の杭荘内における神主・社家の主導権争いが背景にあって、最終的には久井稻生神社神主羽田氏による管理集中が進んだものと考えられるわけである。

また廃仏毀釈にともない、杭稻荷神社名主座から別当寺・供僧寺の僧侶が分離されたであろうことも影響として大きかったと思われる。現在の見子当の「別当」を勤仕するのは俗人であり、そこに仏教色は全くない。現在、見子座の成員には、職掌のない者が少なからずみられる。杭荘における神主・社家の主導権争いと廃仏毀釈にともなう別当寺・供僧寺僧侶の分離が、そうした事態の直接の背景になっているものといえよう。ところで、このような神主・社家の主導権争いの背景には何があるのだろうか。

中国地方にも、近世初頭に行政組織として庄屋・組頭が設置された。この庄屋と名主座との関係であるが、詳細は不明である。<sup>(65)</sup>『久井町誌』に幕末から明治維新期にかけての庄屋の名前が挙がっている。<sup>(65)</sup>山名小太郎（江木村）、田中清七郎・井上讓四郎（下津村）、半田嘉三郎・秦又一郎（吉田村）、栗原虎太郎（勘原村）、栗原昇三郎（羽倉村）、佐々木良右衛門（和草村）、井上慎太郎（黒郷村）、金行九郎兵衛（泉村）の一〇人がそうであるが、これと一致する名主座成員は、泉村の金行九郎兵衛（領家座貞末名）のみである。<sup>(66)</sup>これ以外に村落名と苗字のみが一致するのは、江木村の山名氏（領家座）と下津村の井上氏（領家座・下津八幡宮）のみである。これ以外の七人は、名主座のなかに全く見当たらない。したがって少なくとも幕末から明治初頭においては、名主座は村落有力者を包摂する存在ではなかったのである。

この点は近世のどの時期であるかによって相違があると思われるが、名主座が集団としての村落行政能力を喪失していることは明らかであろう。このことはまた、名の形骸化とともに、名主座が祭祀組織として純化していく大きな契機であったことはまちがいない。

このような名主座の祭祀組織への純化のなかで、惣荘名主座による個別村落名主座・宮座に対する規制強化をはかることにより、伝統的な身分秩序維持の権威的組織としての延命が模索されたのであろう。

その過程のなかで神主・社家の主導権争いがなされ、最終的には久井稲生神社神主への機能集中に帰結したものと思われる。

#### ④名単位の祭祀

ところで、山科家文書には、「貞光鋪神様明田入用覚(帳)」なる史料が、一七八一(天明元)年、一八二五(文政八)年、一八三一(文政一四)天保二)年の三年分残されている。<sup>(67)</sup>

貞光は杭荘の名の名称であり、「明田」は名田であると思われる。

これらの帳面には、多様な人物が記載されており、その各々がそれぞれ三反七畝から二歩の田地を振り分けられ、また祭祀に対する一定の醸出をおこなっている。

まず多様な人物がみられることから、単なる同族祭祀とは異なるものと思われる。また各人に振り分けられた田地は、「明田」(名田)の一部とみることができる。

近世の中国地方には、三宝荒神を祭る荒神名という祭祀組織があることが指摘されている。<sup>(68)</sup>しかし、山科家文書には、別に三宝荒神神楽を差定している組織があり、<sup>(69)</sup>貞光鋪神明田が荒神名ではないことは明らかである。

以上の点から、これは名を単位とする祭祀の存在を示すものといえよう。貞光名を単位として、名主及び作人に相当する(していた)者たちによる共同祭祀と思われる。

名を単位とする祭祀は、貞光名だけではなかった(表3)。神社合祀で消滅した神社のなかに、清宗供神社、清宗大番神社、田郎丸供神社、金政供神社、金政奥敷神社、実光敷神社、貞宗供神社、貞光供神社、宗平供神社、行広大番社、石丸敷神社などの社名がみえる。<sup>(70)</sup>これらの神社には、それぞれ清宗、太郎丸、兼正、実光、貞宗、貞光、宗平、行広、

石丸などの名の名前が付けられている。これら神社の祭祀のありかたは不明であるが、貞光鋪神のような名単位の祭祀組織だったのではなからうか。なお、貞光供神社と貞光鋪神との関係は不明である。

それでは、このような名単位の祭祀は中世にまで遡及する存在なのだろうか。これについては全く徴証がないが、同じく名を単位とする荒神名が中世の所産であったことが参考になるのではなからうか。<sup>(71)</sup>

杭稲荷神社の名頭の少なくとも一部は、このような名単位の祭祀組織を背後にもつことによって、杭稲荷神社名主座祭祀の責務を果たしていたのではないだろうか。

#### おわりに

以上、備後国杭荘における名主座の構成とその運営のありかたについて考察した。

杭荘では、杭稲荷神社の惣荘名主座、下津八幡宮の準惣荘名主座、良神社など荘内一二の個別村落名主座・宮座が重層的に存在していることが確認できた。

また杭荘では惣荘名主座の見子当が惣荘名主座のみならず、個別村落名主座・宮座の運営においても大きな影響を有する存在であったことが確認できた。見子当は荘内の神主・社家のネットワークの中核に位置する司令塔的な存在であった。そうした全荘的な名主座運営のシステムを、本稿では不十分ながら見通すことができた。

またこの神主・社家の集団が、近世における名主座の祭祀組織純化の過程で主導権をめぐる争いを起こしていったことも推測できた。この主導権争いがかえって、近世名主座に関する史料の伝来を妨げているのではないかと思う。

特に近世史料の伝来の乏しさは、名主座研究における大きな障害であ

表 3 名単位の祭祀一覧

祭神名または神社名	対応する名	名が所属する座	名の所在地	合祀先神社	備考	出典
貞光鋪神	貞光名	地頭座・艮神社	江木村		貞光供神社との関係は不明	①～③
貞光供神社	貞光名	地頭座・艮神社	江木村	艮大御社	貞光鋪神との関係は不明	④
貞宗供神社	貞宗名	地頭座・艮神社	江木村	艮大御社		④
清宗供神社	清宗名	地頭座・艮神社	江木村	諏訪大御神社	清宗大番神社との関係は不明	④
清宗大番神社	清宗名	地頭座・艮神社	江木村	諏訪大御神社	清宗供神社との関係は不明	④
田郎丸供神社	太郎丸名	地頭座・艮神社	江木村	諏訪大御神社		④
金政供神社	兼正名	見子当・地頭座・艮神社	江木村	諏訪大御神社	金政奥敷神社との関係は不明	④
金政奥敷神社	兼正名	見子当・地頭座・艮神社	江木村	諏訪敷神社	金政供神社との関係は不明	④
実光敷神社	実光名	領家座	羽倉村	諏訪敷神社		④
宗平供神社	宗平名	領家座・下津八幡宮	下津村	艮大御社		④
行广大番社	行広名	領家座・下津八幡宮	吉田村	市木島御社		④
石丸敷神社	石丸名	領家座・下津八幡宮	吉田村	天神社		④

【典拠】（山は山科家文書の写真版を意味する）

- ①天明元年貞光鋪神様明田入用覚帳（山 1-02-0043-0001 ～ 0011）  
 ②文政 8 年貞光鋪神様明田入用覚（山 1-03-0004-0001 ～ 0010）  
 ③文政 14（天保 2）年貞光鋪神様明田入用帳（山 1-03-0003-0001 ～ 0009）  
 ④明治 5 年御社合併万記覚（山 1-02-0045-0001 ～ 0011）

る。本稿では、近代史料を活用することによって、名主座の構成や運営のありかたを何とか再現できないかと努めた。

しかし近世における名主座の変化について詳しい知見が得られなかったことにはかわりはない。ただ史料が存在しないことが、中世的な祭祀組織が何も変化せずに近代にいたったことを意味するわけではない。従来から指摘されている名内部の変化とともに、個別村落宮座が惣荘名主座に与えた影響、名主座と村落行政組織との乖離など、考察すべき点は少なくない。

従来、名主座の存在が指摘されていた山陽・山陰地方に加えて、四国の讃岐国・阿波国・土佐国、九州の豊前国・豊後国・筑前国・筑後国・肥前国などにも名主座が存在していることがわかってきた。<sup>②③</sup>さらに能登国・美濃国・三河国・遠江国など中部・北陸地方にも名主座が存在している。畿内でも山城国や和泉国には名主座がみられるが、ほぼ畿内近国の隅次成功制宮座分布地域を取り巻く形でドーナツ状に名主座が分布していることが明らかになっている。

この点から、少なくとも中世後期に関しては従来のような東西二分論のような村落類型論は成立しないことが明白になった。

今後は、どのような歴史的経緯でこのように村落内身分の各類型が分布したのかという歴史的な意味が問われることになる。またさらに、名主座分布領域のさらに外側の地域をどう位置づけるべきかが問題になる。

今後、以上のような点に留意しながら、名主座の研究を続けていきたい。



註

- (1) 名主座に関しては、蘭部寿樹『村落内身分と村落神話』（校倉書房、二〇〇五年、第二章）及び同「名主職と名主頭役身分―安芸国久島郷を中心に―」（『米沢史学』二二二号、二〇〇六年）、同「周防国賀保荘における名主座について」（『米沢史学』二三三号、二〇〇七年）、同「村落内身分の地域類型と讃岐国詫間荘」（『山形県立米沢女子短期大学紀要』四三三号、二〇〇八年）、同「名主座の変質とその意義―讃岐国井原荘の冠尾八幡宮宮座―」（『名主座の分布領域と讃岐国』（いずれも『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三五五号、二〇〇八年）、同「中部・北陸地方の名主座について」（『山口県における名主座について―いずれも『米沢史学』二四四号、二〇〇八年）、同「山陰地方の名主座について」（上・下）（『山形県立米沢女子短期大学紀要』四四四号、『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三六六号、二〇〇九年）、同「徳島県・高知県の名主座と名主集落について」（前掲『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三六六号）、同「大分県の名主座について」（『史境』五八八号、二〇〇九年）、同「福岡県における名主座について」（『兵庫県西部における名主座について』（『米沢史学』二五五号、二〇〇九年）、同「村落内身分の地域分布と開発」（坂田聡編『禁裏領山国荘、高志書院、二〇〇九年）、同「畿内における名主座について』（『山形県立米沢女子短期大学紀要』四五五号、二〇〇九年）、同「紀伊国の名主座について」（上・下）（『和歌山地方史研究』五八・五九号、二〇一〇年）、同「美作国・備前国の名主座について」（『吉備地方文化研究』二〇号、二〇一〇年）、同「広島県の名主座と荒神名について」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三七七号、二〇一〇年）、同「備中国の名主座について」（『米沢史学』二六六号、二〇一〇年）などを参照のこと。
- (2) 藤井昭『宮座と名の研究』（雄山閣出版、一九八七年）。この他に『久井町誌』（久井町、一九九七年）にも当該名主座に関する記述がみられるが、内容的には藤井説をほぼそのまま踏襲したものである。
- (3) 慶長三年備後国御調郡杭稻荷社御祭御頭注文（山科勝美家文書写真版1-01-0007-0001～0003。以下、同家文書を示す際は、山1-01-0007-0001～0003のように写真整理番号で記す。山科文書一号、『広島県史』古代中世資料編Ⅳ、広島県、一九七八年）。
- (4) 杭荘内では、他に定光卓蔵氏所蔵文書、藤川寿水氏所蔵文書の存在が知られる（前掲註（2）藤井著書六〇～六一頁の注（11）・（13））が、今回、調査できなかった。
- (5) 『日本歴史地名大系三五 広島県の地名』（平凡社、一九八二年、三六二頁）、『角川日本地名大辞典三四 広島県』（角川書店、一九八七年、三〇九～三二〇頁）など。
- (6) 文久元年備後易御調縣杭之庄江木邑稻荷大明神由来記（久井稻生神社文書写真版009-0013～0020）。以下、同社文書を示す際は、稲009-0013～0020のように写真整理番号で記す。
- (7) 藝藩通志巻九八（『藝藩通志』巻四、国書刊行会、一九八一年、一六四七頁）には、「祇園社は地主神と称し、稻荷神勧請せざる前より此社ありといひ伝ふ」とある。
- (8) 前掲註（3）に同じ。
- (9) 文政三年寛（稲003-0002～0007）。
- (10) 玉浦護『久井稻生神社宮座』『御神酒献備之古式』（詳解）（久井町文化財協会、一九六八年）。
- (11) 寛永元年領家座頭文（稲010-0002～0003）。
- (12) 明治四十二年一〇月御当帳写（『昭和七年二月神社昇格願』所収文書、稲150-0015～0024）。この写のうち、領家座の分の頭文は山科家が所持している（明治四十二年一〇月稲生神社東座（領家分）御当帳、山1-03-0014-0001～0017）。
- (13) 備中国新見荘では、建武年間（一三三四～一三三八）に個別村落が徴税の単位となっている（我妻建治「新見庄の『村落』の構成的展開」、『日本歴史』二〇・二二二号、一九五八年）。
- (14) 前掲註（2）藤井著書及び前掲註（1）蘭部著書。
- (15) 年末詳神子とう覚（稲009-0004～0010）。なお、この文書には、宝暦四年の年紀を有する同じ表題の文書が合綴されている。したがって、この文書は一七五四（宝暦四）年からそれ以前の文書であろう。
- (16) 勘仲記正応六年八月四日条（増補史料大成 勘仲記）三、所収。
- (17) 観応二年二月一五足利尊氏下文（福山史料三十二附録古文書、『大日本史料』六編一四、観応二年二月一五日条、七四四頁）。なお、文和元年及び同二年に同地頭職の沙汰付及び打渡の指令が出されている（文和元年一〇月三日某沙弥奉書、鼓文書、『大日本史料』六編一七、文和元年一〇月三日条、九四頁。文和二年九月一三日岩松頼有打渡状、福山史料三十二附録古文書、『大日本史料』六編一七、文和元年一〇月三日条、九四～九五頁）。
- (18) 文和二年一二月日三吉寛弁訴状案（福山史料三十二附録古文書、『大日本史料』六編一八、文和二年一二月三日条、五〇八～九頁）、文和二年一二月三日室町幕府裁許状（鼓文書、『大日本史料』六編一八、文和二年一二月三日条、五〇九～五一〇頁）。
- (19) 前掲註（1）蘭部著書第二章。
- (20) 天文二三年四月四日桂源石衛門尉龍延書下（山1-01-0001-0002、『御調郡誌』第七 神社、四三一頁所収）、（天文一七年）三月一五日毛利元就判物（萩藩閥閥録巻四九 小寺忠右衛門家文書、『萩藩閥閥録』第二巻、二一九頁）。



- (21) 前掲註(1) 蘭部「名主職と名主頭役身分」。
- (22) 前掲註(15) に同じ。
- (23) 見子当の名所有者の比定には、大正六年一〇月久井稲生神社見子当帳(稲079-0001～0024)を用いた。以下も同じ。
- (24) 良神社の名については、大正五年二月月良神社御当帳(稲078-0001～0016・山1-03-0014-0001～0007)を参照した。
- (25) 「ものもう」・「ものもうす」(いずれも漢字表記は「物申」)、『日本国語大辞典 第二版』第二卷、小学館、二〇〇一年。
- (26) 天文三年一〇月一六日桂景信・真田景久・赤河元保下知状(折紙。山1-01-0004-0001。『御調郡誌』第七 神社、四三一頁に収録されているが、誤読箇所がある)には、「神職」としての「物申役」という記述がみられる。ただし、この「物申」は地頭座の物申である貞光名に関する記録である。この点は後述する。
- (27) 藝藩通志(前掲註(7)と同頁)に「ものまおし 祝白貞光」とある。
- (28) 明治一四年三月六日良神社諏訪神社社衛倚依頼状(山1-03-0032-0001)、明治一七年良神社諏訪神社社用係任命書(山1-03-0082-0001)。
- (29) 前掲註(26) 天文三年一〇月一六日桂景信・真田景久・赤河元保下知状など。
- (30) 前掲註(3) に同じ。
- (31) 宝永五年一月諸社社家列座次第(稲001-0002～0004)。
- (32) 前掲註(15) 史料には「これそね」とあるが、前掲註(23) 史料の同じ箇所の注記に「これハそね」とあるところから、本文のように判断した。
- (33) 「まへとい」が前土居であり、大原家の居所または屋号であることは、慶安二年九月下津八幡宮御当覚(稲076-0003)に「前土居大原宗臣」とあることによる。
- (34) 一九一六(大正五)年一〇月下津八幡神社御当帳(稲076-0001～0015)に下津八幡神社の(旧)神主として大原氏がみえる。この大原氏は、一七〇八(宝永五)年一月諸社社家列座次第(稲001-0002～0004)に「下津村神主 大原山城守宗」とみえるので、少なくとも近世以来の下津八幡神社神主であったのだろう。
- (35) 前掲註(2) 「久井町誌」(三六八～三七〇、三七六頁)。
- (36) 年未詳稲生神社大祭絵巻(稲008-007～008-0024)。
- (37) 『藝藩通志』翻刻文(前掲註(7)と同頁)には「稲荷宮注連頭、亀甲山神宮寺、祠官、秦吉光、祝白貞光、別当猪儀兼政、門田利春」とある。しかし、この読点の打ち方には一部問題がある。「祠官、秦吉光」は、前後の関係からみて「祠官 秦吉光」でなければおかしい。そこでまた、同じく「稲荷宮注連頭、亀甲山神宮寺」も、「稲荷宮注連頭 亀甲山神宮寺」である。したがって注連頭を勤めていたのは、亀甲山神宮寺ということになる。
- (38) 前掲註(24) に同じ。
- (39) 前掲註(12) 明治四二年一〇月御当帳写。
- (40) 前掲註(10) 玉浦著書一四～一五頁。  
現在、見子当の文書は、見子当の触頭を兼任する久井稲生神社宮司・羽田氏が保管している。領家座の文書は、領家座触頭の山科氏と宮司の羽田氏が保管している(宮司の羽田氏がなぜ保管しているかについては後述する)。定光家文書については今回、調査できなかったが、定光氏が寛保元年九月吉日地頭座御頭文を所持していたことが藤井氏の調査で明らかにされている(前掲註(2) 藤井著書三八頁・六〇頁注(11))。
- (41) 前掲註(15) に同じ。
- (42) 前掲註(24) に同じ。
- (43) 前掲註(26) 天文三年一〇月桂景信等下知状、及び年未詳(天文三年カ)九月一二日右衛門太夫景信書状(折紙。山1-01-0005-0001)。
- (44) 前掲註(10) 玉浦著書一三頁。
- (45) 前掲註(26) 天文三年一〇月桂景信等下知状。なお、前掲註(26)『御調郡誌』(四三二頁)には次のような注記がある。  
右記名者(桂景信・真田景久・赤河元保のこと。蘭部注)は何れも高山城小早川隆景の重臣にて、桂右衛門大夫、真田大和守、赤川左京亮は永禄四年毛利元就父子高山城に入りし際接待係の内なり、是に由つて小早川家と稲荷神社の關係頗る厚かりしことを知るに足るなり。
- (46) 前掲註(26) 天文三年一〇月桂景信等下知状がだされる以前のものと思われる関係文書が数点、山科家に残されている。いずれも貞光氏の物申職所持を支持・安堵するものである。以下、文書名を列挙しておく。天文三年四月四日桂源右衛門尉龍延書下(折紙、同年四月五日佐藤通盛書下(折紙、同年四月一〇日小寺義盛書状(折紙、年未詳(天文三年カ) 九月一二日右衛門太夫景信書状(折紙、年未詳(天文三年カ) 九月一二日三吉信盛書状(折紙))。
- (47) 慶安二年九月下津八幡宮御当覚(稲076-0003)。
- (48) 清兼名は、前掲註(12) 明治四二年稲生神社東座(領家分) 御当帳には領家座の名となっているが、それ以前の領家座頭文にはみえない。
- (49) 前掲註(34) 大正五年一〇月下津八幡神社御当帳。
- (50) 前掲註(1) 蘭部著書一〇一～一〇三頁。
- (51) 前掲註(1) 蘭部著書九六～一〇三頁。
- (52) (A) 一八七九(明治一二)年一月諸神社出勤雜費社入附込帖(横帳、稲

- 009-0044～0114)。(B) 明治一三年一月諸神社出勤雑費社入附込帖(横帳、稲  
009-0121～0173)。(C) 明治一四年一月諸神社出勤雑費社入附込帖(横帳、稲  
009-0174～0197)。(D) 明治一四年四月諸神社出勤雑費社入附込帖(横帳、稲  
009-0198～0251)。以下、これらの史料を典拠とする際は、「附込帖A」のよう  
に示す。
- (53) 前掲註(8)及び(47)に同じ。
- (54) 原田敏明『村祭と座』(中央公論社、一九七六年)、同『村の祭と聖なるもの』(中  
央公論社、一九八〇年)など。
- (55) 萩原龍夫「氏子」(『国史大辞典』第二卷、吉川弘文館、一九八〇年)、蘭部寿  
樹「氏子」(『歴史学事典』第一卷、弘文堂、二〇〇四年)。前掲註(12) 明治  
四二年御当帳のように近代の杭稻荷神社名主座の構成員も「氏子」と呼ばれてい  
るが、これが通常の氏子祭祀とは異なることはいままでもない。
- (56) 前掲註(34)に同じ。
- (57) 明治四年一〇月矢矧神社例祭并年番神式差定録(竖帳、山1-02-0046-0001～  
0007)。
- (58) 前掲註(28) 明治一四年長神社諏訪神社社衛倚依頼状。
- (59) 前掲註(24) 大正五年一〇月長神社御当帳。
- (60) 前掲註(33) 慶安二年下津八幡宮御当覚、前掲註(34) 大正五年下津八幡神社  
御当帳。
- (61) 前掲註(24) 大正五年長神社御当帳。
- (62) 前掲註(24) 大正五年長神社御当帳。
- (63) 宝暦七年江木村諏訪神社縁起(稲010-0007～0012)。
- (64) 前掲註(57) 明治四年矢矧神社例祭并年番神式差定録。
- (65) 前掲註(2)『久井町誌』一九七頁。
- (66) 前掲註(12) 明治四二年一〇月御当帳。
- (67) 天明元年九月(横帳、山1-02-0043-0001～0011)・文政八年二月(山1-03-  
0004-0001～0010)・文政一四年(「天保二年」)二月(山1-03-0003-0001～  
0009)の貞光鋪神様明田入用覚帳。なお、文政一四年は暦の上では存在しないが、  
同帳表紙に「辛卯」(天保二年の干支)とあり、文政一三年が天保元年に相当す  
ることから、文政一四年は天保二年であると判断した。
- (68) 前掲註(2) 藤井著書第二編第三章「御頭の名と荒神名」四二五～四八〇頁。
- (69) 文久二年一〇月三寶大荒神神楽差定(山1-02-0003-0001～0012)、慶応元年  
三寶大荒神神楽差定(山1-03-0013-0001～0007)、明治三年閏一〇月荒神祭  
御神楽差定(山1-02-0047-0001～0011)、三寶大荒神神楽差定断簡(山1-03-  
0042-0001～0004)。
- (70) 明治五年正月御社合併万記覚(山1-02-0045-0001～0011)。
- (71) 前掲註(1) 蘭部「広島県の名主座と荒神名について」。
- (72) 前掲註(1)に同じ。 【二〇〇六年一〇月二日脱稿・二〇一〇年一月二七日加筆】
- 【付記】二〇〇四～二〇〇六年、連年に行った現地調査では、三原市教育委員会、久井稲  
生神社宮司・羽田浩彬氏、三原市久井町・山科勝美氏らのご高配をたまわった。記  
して感謝したい。
- (山形県立女子短期大学、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇〇九年一〇月二日受付、二〇一〇年五月二五日審査終了)

---

## The *Myoshu-Za* in *KUINO-SHO* of *BINGO* Country

SONOBE Toshiki

This article discusses the construction and development of the *myoshu-za* in Kuino-sho, Mitsugi-gun, Bingo-no-kuni (currently the area of Kui in Mihara City, Hiroshima Prefecture). The *myoshu-za* was established in the Chugoku area in the beginning of the 14th century as a group of people who were called *myoshu kashirayaku*, and held social status in a village. The *myoshu kashirayaku* play a social role in a village by serving as *kashirayaku* (a head) of the *myoshu-za* (a kind of *miya-za*) based on the profession of *myoshu*. The social status in a village was certified and guaranteed by each village group. It was valid inside the village and supported by the finances of the village.

The *myoshu-za* of Kui Inari Shrine in Kuino-sho already existed before the first half of the 14th century, and consisted of *Mikonoto* (*Kagura-za*), Higashi-za, and Nishi-za. In Kuino-sho in the last half of the Middle Ages, there were *sosho myoshu-za* of Kui Inari Shrine, and associate *sosho myoshu-za* of Shimotsu Hachiman Shrine (based on *myo* of Shimotsu Village and Yoshida Village), and individual village *myoshu-za* of twelve shrines; Ushitora Shrine of Egi Village; Itsukushima Shrine, Tenman-gu Shrine, and an undisclosed shrine (Daisen Shrine?) in Yoshida Village; (Kamigumi) Hachiman Shrine in Waso Village; Takasugi Shrine, an undisclosed shrine (Atago Shrine?), an undisclosed shrine (Kami Ohata Shrine?), an undisclosed shrine (Naka Ohata Shrine?), an undisclosed shrine (Ohata Shrine?), and an undisclosed shrine (the shrine name is unknown) in Azobara Village; and Kotohira Shrine in Shimotsu Village. This raised alarm over the belief of one shrine (*miya-za*) in one village seen in conventional studies.

Key words: *Myoshu-Za*, *Miyaza*, Local Status of villagers, Religious service of *Myo* unit, *KUINO-SHO* of *BINGO* country